

年

タテレビの視聴時間が減っているのだが、それでも長いこと、NHKのニュースはなぜか見ておかないといけない気がして、その時間だけはリモコンのボタンを押すことが習慣化していた。でも、それも途絶えた。世界で何が起きているのか見ておかないといけない、悲惨だからと避けてはいけない、と何があっても見ていたのに、精神に変調を来しそうで耐えられなくなってしまう。ある種の耐性が衰えたらしい。ただ、代わりに新聞を以前よりもよく読むようになったので、情報量に変化はない。新聞を自分のペースで読む方が情報収集の方法としてうんと負担が少ないことに気づいた。

バラエティ番組も、ついていけば見ないではないのだが、ちよつとでもあざときを感じるとそそくさとテレビの前から退散する。残念なことに、テレビのそれは増す一方のように思える。これも、ぼくの方が変わってしまったのかもしれないが。

昨秋だったか、高尾小学校の子ども落語が民放のバラエティ番組に取り上げられた。全国放送の長寿番組で、ずっと以前に何度か見たことがある。学校から連絡をもらってワクワクして見た。こういう場合はあざ

ときに対する不寛容も吹っ飛んでしまう。子どもたち、学校職員、地域の人々、みんな誇らしい気持ちで見たことだろうと思った。

が、最近になって、撮影時の様子を伝え聞いた。ずいぶん長時間の取材だったらしいが、そのうち撮影クルーが子どもたちにあれこれと要求するようになってきた。細かいことまではわからないが、ポーズとか言い回しとかに注文を付けたらしい。より番組を盛り上げるために、という思いだったのだろうが、子どもたちにとつてはそれが苦痛だった。べそをかく低学年の子もいたようだ。たまりかねた高学年の子がクルーたちにぎつぱりと言った。「ぼくたちは、そんなことを言われたくもないし、したくもない。」

これまでたくさんさんの取材を受けてきているので、高学年ともなれば多くのメディア関係者と接しているから、人を見る目も育っているのだ。これを教えてくれた人の言葉がとてもよかった。「私たちはこういう子どもを育てるために落語をしてきたのかもしれないね。」許容範囲を超えたあざときにはつきりと否を伝えた子がいたことを、その番組では一切触れていない。これははたして当たり前だろうか。

空き家 5  
木幡智恵美

生家の行く末⑧

元日から仕事だという長男が、年末に自家用車で九時間かけて御殿場から帰ってきた。短い滞在の間、あれこれ聞いた中で、学生時代のサークル仲間とやっている妙な年越し行事について、「今年はしなかつたんだね」と尋ねた。「もうやつたよ。今年はタコ焼き」とのこと。サークル仲間の誰かの家に集まり、毎年何かしらの食べ物を煩惱の数である百八つ皆で平らげて年越しするのだ。「タコ焼き百八個じゃないよ、百八舟だよ。無理だったわ」。ミカンに豆腐、ハンバーガーなど、毎年品を替えてやっている。ある年は、仲間の実家の風呂をきれいに洗い、そこでフルーチェを百八箱分作って食べたとのこと。今年で十八回だというが、いい年になった者たち、いつまで続けることだろう。

十年以上前になると思うが、その行事をするのに、「出雲の家に集まっているい？」と長男が連絡してきたことがあった。「大騒ぎして近所迷惑にならないようにすればいいよ」と返事して、布団を揃えたり、グラスを洗ったり、出雲市駅まで車でピストン送迎をする計画を立てたりしてその日を待った。ところが、土壇場になって仲間のうち二人がインフルエンザに罹り、計画は没になってしまった。

空き家でも、そこに建っていれば、あれこれ利用価値はある。近所の家のリフォームの際、家具を置かせてくれと頼まれたこともあるし、孫たちを海に連れて行く際は海の家にもなる。ただ、心配なのは、私たちがこの世から消えた後のこと。子どもたちに面倒をかけたくはない。だから、元気でいるうちに何とかしなくてはとあれこれ考えているのだが…。

今年も、年末に掃除をし、鏡餅を供えた。まだ畑仕事をしているうちは、どうしてもこの家が必要だ。少しずつ耕作面積を狭め、機械を使つての耕作は辞めた。今のところ、畑仕事を辞める時が潮時だと考えている。農作業をするのに身体が思うように動かなくなったら、畑仕事は終わりにし、生家の後始末にかかろうと思つている。その時が来るまで、家の維持は続けていくことにしよう。

30代フリーター 台湾の総統選が終わった。世界が注目した選挙だった。

年金生活者 台湾はその権力のあり方からすれば、れっきとした国家だが、世界の大多数の国々は国家と認めていない。「ひとつの中国」を掲げる中国が台湾を自国の一部と主張し、統一を目指しているからだ。国家でありながら国家と認められないこの特異な状態に対して、台湾人の多くが望んでいるのは「独立」でも「統一」でもなく、「現状維持」とみられている。

中国という巨大な「帝国」に飲み込まれるのではなく、逆に国民国家としてのナショナリズムに傾斜するのではない、その独特の民意は台湾を各国にくらべてより開かれた国家にする作用をしていると思える。アジアで初めて同性婚を法制化したのもそのあらわれと言っている。

中台間のサービス貿易協定に反対して学生らが立法院を占拠した2014年の「ひまわり学生運動」も、国家が開かれていることの証左だ。3週間も言い切り、その欠かせぬピースとして中台統一にこだわる習」と習近平の執念を伝えていた(12月27日朝刊)。

年金 習がしきりに「中華民族」を強調するのは、中国を均質な国民で構成される近代的な「主権国家」と位置づけたがっていることのあらわれと見る事ができる。現実の中国は均質な国民で成り立っているわけではなく、大多数を占める漢族のほかいくつもの少数民族が存在する。そして統治の仕方は、国家が権力を独占するのではなく、地方政府が権力を分け持つなど、前近代的な「帝国」の伝統を残している。

「主権国家」がナショナリズムに傾斜しがちなのに対し、「帝国」はグローバルな振る舞い方をする。周辺国を臣下とみなす中国の古代以来の冊封体制は一種のグローバルイズムだ。その伝統が現代のグローバルイゼーションと共振し、外資の導入による資本主義の発展をあと押しした。

世界の建前は国家間に上下を設ける

上におよぶ議会の占拠を通常の国家権力が許すはずがないからだ。

30代 姚人多という、台湾の現総統の元最側近が去年暮れの朝日新聞で「台湾人は変化を恐れません」と語っていた(12月20日朝刊)。「過去にはオランダ、日本、中国などの外来政権が台湾を支配し、去つていきました。私たちは、政治に何度もだまされてきました。だから、政権に早く成果を出させないと、明日には権力者が台湾からいなくなつていくかもしれないと考える習慣がついているのです」

年金 「政権に早く成果を出させないと」という言い方は、台湾人が権力というものを黙って従う対象ではなく、「成果」を手にするために利用する対象と考えていることをうかがわせる。「明日には権力者が台湾からいなくなつていくかもしれないと考える習慣」は、権力者というのは「万世一系」ではなく、いつでもいなくなるし、いつでも交代し得るものだと考える習慣でもある。

「帝国」を認めない。国家間の対等を前提にした「主権国家」こそ正しいあり方としている。それは領土の線引きのあいまいな冊封体制とは異なり、国境線を厳格に定めようとする。そんな「主権国家」の列強に「帝国」の清が領土のあちこちをむしり取られ半植民地化された歴史は、中国に「帝国」か

そうした権力観は民主主義のとらえ方にもあらわれている。選挙はしょっちゅう行われているのに、政権交代はめつたにない日本とは対照的に、台湾では1996年に初めて直接投票で総統が選ばれてから20年の間に3度の政権交代があった。

国民党の独裁が続いていた台湾が民主化されたのも、日本のようにアメリカに押しつけられた結果ではなく、台湾人が勝ち取つたものだ。つまり自力で権力者を交代させた。民主主義を政権交代のための装置ととらえる意識は最初からあつたと推察される。

国民に対して国家を開いていこうとする台湾のこうした姿勢は、国家を閉じ続ける中国からは国家の解体に見えるに違いない。それが大陸全土に及ぶことを恐れていると推察される。96年の総統選に圧力をかけるために中国が行つた軍事演習はその恐怖心の表出でもあつた。

30代 暮れの朝日新聞は「中華民族の偉大な復興を政権の『歴史的使命』と

ら「主権国家」への脱皮を目指すことを強いた。それが孫文らによる辛亥革命につながり、現在の共産党政権にも受け継がれている。

「帝国」と「主権国家」、グローバルイズムとナショナリズムといった相反するベクトルのせめぎ合いの中に現在の中国はある。その渦が押し寄せる台湾は、対立するベクトルのどちらにも偏らない未来に向かう可能性をほらんでいる。

30代 台湾と国交のある国は13カ国にとどまるのに、国交のない60カ国に窓口機関が設けられ、大使館と同様の査証業務などを行っている、とウィキペディアにある。

年金 自国を国家として承認してくれない多くの国を相手に友好関係を結ぶのは「主権国家」の常識からは逸脱している。その意味では台湾は近代国家を超える一面を有している。それは国家を国民に対して開く作用をしていく、他の国家に対して開く作用をしていくと考えられる。

ニュース日記 906  
中村 礼治

## 台湾の新しさ